

漱石における「自己本位」と「自我」

はじめに

漱石は、次のように言っている。

私は此自己本位といふ言葉を自分の手に握つてから大變強くなりました。彼等何者ぞやと氣慨^{きがい}が出ました。今迄茫然と自失してゐた私に、此所に立つて、この道から斯う行かなければならないと指圖をして呉れたものは實に此自我本位の四字なのであります。

(「私の個人主義」⁽¹⁾)

これは、大正三年(一九一四)学習院輔仁会における講演の一節である。「自己本位」とは、文芸に対する立脚地を自己におく、ということである。それまで漱石は、西洋の文学に權威を認め、そこに文学の本質を見いだそうとしていた。それが「彼等何者ぞや」と考えるようになったのはなぜか。そして、その立脚地は具体的に何か。また「自己本位」と「自我」の關係を考え、「自我」の本質をその作品群によってさぐろうとする。これが小論のねらいである。

英文学と漢文学

加藤 富 一

漱石は、慶応三年(一八六七)の生まれである。翌年の慶応四年は明治と改元されたから、漱石は近代日本の出発と同時に生まれたといえる。そして、近代人の悩みを背負つて、五十年の生涯を歩きつづけたのである。近代人の悩みとは何か。漱石にとって、「文学とは何か」であり、また「生きるとは何か」「人間とは何か」である。

さて、西洋文学が、近代の日本にむかつて流入して来た。文明開化の日本にとって、西洋は「神」である。江戸末期までの日本の文学は、まったく無意味なものになった。「體力・腦力共に吾等よりも旺盛な西洋人が百年の歳月を費した」⁽²⁾その西洋の文明を、漱石も尊重する。だからこそロンドンに行つて、西洋文学を研究した。下宿に閉じこもつて、ひたすら英文学の作品を読んだ。一年経過した。読みおわった書物の量を見て、愕然とした。漱石は「讀了せざる書冊の數に比例して、其甚だ僅少なるに驚ろ」⁽³⁾いた。そこで漱石は「一切の文學書を行李の底に收め」⁽⁴⁾てしまふ。文學書を読んで文学を知ろうとするのは、あたかも血で血を洗うようなものだ、と悟るのである。読んだ量の少ないこともさることながら、いくら読んでみても、そこに文学の真髓を發

見ることができなかったのである。そこには、イギリスの学者や批評家の考えたことが書かれているにすぎないのである。育った風土の差による感受のずれは、いかんとも仕方がない。そしてそれを主張しようとしても、主張しきれないもどかしさを感じる。主張するには、その抛りどころがなければならぬ。漱石は漢籍を読んでいるときは、こうしたもどかしさは感じない。漢籍は、その中へはいりこんでいくことができる。そこに、文学とはこういうものでなろうかと感じさせられるものがある。しかし英文学には、はいつていけないものを感じる。これは、育った風土の差異や、先祖から継承した文化の差異である。そこで漱石は、「私の個人主義」の中で、次のように回顧する。

いくら書物を読んでも腹の足しにはならないのだと諦めまして。——略——この時私は始めて文學とは何んなものであるか、その概念を根本的に自分で作り上げるより外に、私を救ふ道はないのだと悟つたのです。

(二三九ページ)

そこで、漱石を救うものは何か。上述により、それは漢文学でなろうか。漱石は少年の時から、漢籍に親しんでいた。『木屑録』⁽⁵⁾の冒頭に「余兒時誦唐宋數千言喜作爲文章」(余、児たりし時、唐宋數千言を誦し、喜びて文章を作爲す)と書いている。「児たりし時」は、次の文により、十二歳のころと考えられる。

当時の同級生であつた画家島崎柳塙の手元に、友人達と一緒にやつた其頃の廻覧雑誌が一冊保存されて居るのであるが、これに塩原金之助の『正成論』が載つて居る。明治十一年二月十七日の日附であるから現在残こつて居るものでは一番古い文章である

が、全文漢文調の雄勁達意のもので、わづか三百字余りの短文ではあるが、十二歳の少年の筆になつたとは思へぬ堂々たる文章である。漢文の素養が相当のものであつた事を立派に証明して居る。

これは漱石門下の松岡譲の文である。⁽⁶⁾『正成論』は、我が国南北朝ころの南朝の忠臣楠正成を論じたものである。その文章は「雄勁達意」という。少年夏目金之助は、すでに、文学とはどんなものであるかを、実作においてわずかに示している、といえよう。しかし、漱石自身はそれを、心の奥底で確認することはなく、大学では建築科に進もうと考えたりし、結局は漢文学ならぬ英文学の道を歩く。「唐宋數千言」は何をさすであろうか。佐古純一郎氏が、二松学舎の教科内容(漱石が学んでいたころの)を次のように掲げている。⁽⁷⁾

- 三級第三課 日本外史、日本政記、十八史略、国史略、小学。
- 三級第二課 靖献遺言、蒙求、文章軌範。
- 三級第一課 唐詩選、皇朝史略、古文真宝、復文。
- 二級第三課 孟子、史記、文章軌範、三体詩、論語。
- 二級第二課 論語、唐宋八家文、前後漢書。
- 二級第一課 春秋左氏伝、孝経、大学。
- 一級第三課 韓非子、国語、戦国策、中庸、莊子。
- 一級第二課 詩経、孫子、文選、莊子、書経、近思録、荀子。
- 一級第一課 周易、礼記、老子、墨子、明律、令義解。

ここには、四書五経から日本漢文を含み、律令(法律)に至る広い範囲の漢籍が並んでいる。これは文学というよりは、哲学・史学に属するであろう。しかし、唐詩選・三体詩があるし、文章軌範の名も見え

る。これらは文学の精髓である。漱石は、ここにもどるべきであった。漢文学によって、自己を「救ふ」べきであった。

文学論ノート

さて、英文学で「腹の足しに」なるものを自分で作りあげるために、漱石は腹案を立てた。それが、次に掲げる『文学論ノート』の「大要」である。

- (一) 世界ヲ如何ニ観ルベキ
- (二) 人世ト世界トノ關係如何、人世ハ世界ト關係ナキカ、關係アルカ、關係アラバ其關係如何
- (三) 世界ト人世トノ見解ヨリ人世ノ目的ヲ論ズ
- (四) 吾人人類ノ目的ハ皆同一ナルカ、人類ト他ノ動物トノ目的ハ皆同一ナルカ
- (五) 同一ナラバ衝突ヲ免カレザルカ、衝突ヲ免カレズンバ如何ナル状況ニ於テ又如何ナル時期ニ於テ如何ナル方法ヲ以テ此調和ヲハカルカ
- (六) 現在ノ世ハ此調和ヲ得ツ、アルカ
- (七) 調和ヲ得ズトスレバ吾人ノ目的ハ此調和ニ近ヅク為ニ其方向ニ進歩セザル可ラズ
- (八) 日本人民ハ人類ノ一國代表者トシテ此調和ニ近ヅク為ニ其方向ニ進歩セザル可ラズ
- (九) 其調和ノ方向如何、其進歩ノ方法如何、未來ノ調和ヲ得ン為ニ一時ノ不調和ヲ來スコトアルベキカ、之ヲ犠牲ニ供スベキカ
- (十) 此方法ヲ稱シテ開化ト云ヒ其方向ヲ名ヅケテ進化ト云フ

(一) 文芸トハ如何ナル者ゾ

文芸ノ基源

ククノ発達及法則

文芸ト時代トノ關係 etc

(二) 文芸ハ開化ニ如何ナル關係アルカ進化ニ如何ナル關係アルカ

(三) 若シ此方法ト方向ニ抵触セバ全ク文芸ヲ廃スベシ

(四) 若文芸ノ一部分ガ此ニ無關係ニテ一部分ガ有益ニ一部分ガ有害ナラバ第三ヲ除スベシ

(五) 文芸ノ開化ヲ裨益スベキ程度範圍

(六) 日本目下ノ状況ニ於テ日本ノ進路ヲ助クベキ文芸ハ如何ナル者ナラザル可ラザルカ <西洋

(七) 文芸家ノ資格及決心

この腹案どおり書くには十年かかる。大事業である。まず、世界観からはじまる。そして世界と人生の論。世界は、かく始まり、かく構成され、かく現存している。そして人間は、その中でかく出現し、かく生存し、かかる現状にある。その、世界と人間とのかかわりを考えた時、人間の生きる目的はいかなるものであるべきか。以上のことを従来の文学は考えていない。これを哲学や倫理学にゆだねているからである。しかし、この前提に立たずして文学は論ぜられない、と漱石は考える。人がこの世に生きている目的、これを考えずして人を描くのは意味がない、人を描いたことにならない、と考えるのである。ここまでだけで大事業である。もちろん、それをすでに東西の先哲が成しとげているから、それを借りてくれればよいとは言える。しかし、それは文学者漱石の世界観ではない。文芸家漱石の人生観ではない。そこにはまさに、漱石の「自己本位」な世界観・人生観が要求される

であろう。漱石はそこに「腹の足しに」なるものを発見しようとするのである。これを、先哲からの借り物に頼る気持は毛頭ない。ただ、この「自己」のものを築き上げるには長い年月がかかる。しかし、漱石は、この仕事ならば「陰鬱」にはならない。「軽快な心をもつて」たずさわることができる。

大事業の内容は、さらに続く。四(イ)で、人の生きる目的、「人類ノ目的」を考え、それと「他ノ動物」の目的との調和が存在しうるかを考える。その調和が存在しない場合は、それを存在させるために人類は進歩しなければならない。この進歩がなければ、人類は生きる意義を失う。「他ノ動物」を庄殺する人類は不調和の中でしか生きていないからである。この進歩を実現するためには、「日本人民」は渾身の努力をしなければならない。でなければ、「日本人民」の存在理由は認められないことになる。

そこで(ウ)の「其調和ノ方法如何」ということになる。この具体的方法こそが「開化」と呼ばれるものだ、と漱石は考える。「開化」とは、本来そういうものでなければならぬ。「開化」は単なる物質文明の開発をさすのではない。むしろ、以上たどって来た世界観・人生観の上に立った、「日本人民」の具体的な調和方法や進歩方策が「開化」というものだ、と漱石は考えているはずである。

以上の腹案で『文學論』を書き続けて、五、六年はかかるであろう。それが書けたらようやく、(エ)の「文芸トハ如何ナル者ゾ」という問題にとりかかることになる。漱石にとって、以上の前提なしに文芸作品を考えることはできないのである。「自己本位」の文芸は、「自己」の存在理由が、以上のように確立した上でなければ、その意義を認められないからである。さてその文芸について、その「基源」をさぐらなければならぬ。そして、その「発達」のあとをたどらなければならぬ。

そこに「発達」の「法則」を発見しなければならぬ。まず、文芸の「基源」は、おそらく前述の世界観・人生観の流れの中にあるものである。世界の存在理由、人間の生きる意義、それらを感動的に表現するのが文芸である、と考えられるからである。漱石の腹案を検討してみると、世界観・人生観と、文芸との間には緊密なつながりが存在すると思われる。

次に、「文芸」と「開化」との関係であるが、「調和」と「進歩」をもたらすのが「開化」である以上、「文芸」が「開化」に貢献すべきものであることは論をまたない。「文芸」がそうした方向にないとしたならば、漱石は「文芸」を廃すべきだと考えている。今までの「文芸」の歴史の中に、「開化」への「文芸」の貢献を漱石は見いだすであろう。もっとも、東西の「文芸」の歴史のなかに、漱石の目ざすものは、それほど見あたらないかもしれない。しかしそれは、文芸史の筆者が、漱石の方向で書いていないからである。漱石は「自己」の方向により、文芸史を書きかえるであろう(ただしそれは、十年間の『文學論』著作のあとにならう)。そして、「文芸ノ一部分」が「開化」の方向にとって「有害ナラバ」、それを「除却」する必要がある、漱石が書きかえる文芸史は、新しい様相を呈することになる。

(ウ)で、明治三十四、五年の日本における文芸を問題にする。この問題こそ、漱石の人生を決定するものである。漱石は明治の日本に生きている。その「自己」にとって、過去の日本の、もろもろの文学のありようもさることながら、その流れの中の今の日本の文芸そのものが緊要の問題である。この問題を「自己」の眼で見、「自己」の心で考える。それが「自己本位」の文芸である。

最後の(エ)で、以上を根拠として「文芸家の資格」を考察する。単に西洋の文芸を受容するだけの者は、文芸家とはいえない。むやみに英

国の学者の理論をふりまわす。こういう者は文芸家ではない。文芸のありよう、文芸とはいかなるものか、それを「自己」の心の奥底からつかみとり、その上で論をなす者、こういう者を、文芸家たる資格ありと認めるのである。そして、本当の文芸家は、人類が他の動物との調和・共存の上に立って生き続ける方法を模索し、方法を発見し、「開化」を実現していくべきである、と考えている人である、と漱石は考えるのである。

「自己本位」と「自我」

小論の冒頭に「私の個人主義」を引用したが、その終結部分に「實に此自我本位の四字なのであります」とある。「自我」は「自己」であろう。ただ「自我」は扱いにくいものである。「育った風土」というものとは異なるものである。洋の東西の問題ではない。人間ひとしく有する「我」である。「彼等何者ぞや」は、むしろ容易な問題といえよう。漱石が時間に恵まれれば、なんとか解決できる問題である。十年間という歳月があれば解決できる。ところが「自我」の問題になると、事は容易でなくなる。東と西とか、自と他という相対的な問題ではない。自己のみの問題である。相対的な問題はその優劣を決定すれば落着く。ところが、自己のみの問題は相手がない。実はあるのだが、相手は絶対的なものである。卑小な自己を、絶対と並べて考えなければならぬのである。そこに、相対的な東西・自他と異なる困難な問題を発見するのである。

「自我」について、漱石は哲学的には右のように考えていたはずである。そして、「私の個人主義」に次のように書かれている。

私は多年の間懊悩した結果漸く自分の鶴嘴をがちりと鑛脈に掘

り当てたやうな気がしたのです。猶繰り返していふと、今迄霧の中に閉ぢ込まれたものが、ある角度の方向で、明らかに自分の進んで行くべき道を教へられた事になるのです。(二四一べ)

「多年の間」の「懊悩」は、「自己」が確立できないことであつた。漱石にとって、その確立は「彼等何者ぞや」という段階で、やや満たされる。しかし、それはまだ「鑛脈に掘り当て」てはいない。「鑛脈」は絶対的なものであるはずである。したがって、「掘り当てたやうな気がした」ものは、『文學論』や『文學評論』を含んで、それを越えた「腹の足しに」なるものでなければならぬ。その「足しに」なるものは「文學論ノート」の腹案の前半に示されていた。そして、まず大学の講義という眼前の目的のために『文學論』と『文學評論』を書きあげた。そして、教壇を去つてはじめて、この「鑛脈」を掘る作業をはじめることになる。

ところで、以上の思考の方向は、次に掲げる「自己本位の立場」(吉田六郎)と似たものである。

現在『文學論』『文學評論』という形で残されているものと、この時彼が企てた著述とはよほど趣を異にするものである。今ある『文學論』『文學評論』は帰朝後大学の講義を委嘱され、その要求にかなうべく作られたのであつて、漱石がこの時企てた著述はもっと根本的な、世界観・人生観の総決算であつた。

そして、「総決算」の「註」⁽¹²⁾として次のように書かれている。

彼がここでくわしく説明している「自己本位の立場」の其の実

証と宣明は、提供された大学教授の椅子を抛ったときからはじまる、と云つてよい。

この似た思考には、しかし、大きな隔たりがある。「其の実証と宣明」は、吉田氏の場合、洋の東西の段階は越えているが、ただ「もつと根本的な、世界観・人生観の総決算」といつて結んでいるだけで、その総決算が具体的に何を目ざしたのか、「総決算」によって掘り進んだ過程や成果は示されていない。「総決算であつた」と抽象的に結んでいる。そこで、この示唆を受けて、具体的に「実証と宣明」をしようとする、朝日新聞入社以後、特に後期の作品を検討しなければならぬ。そこに「自己」から「自我」への進展が見られる。そこで、その「自我」に苦しむ漱石の思索をたどる必要がある。それが、小論のこの節の目標である。

漱石は『こゝろ』で次のように書く。

叔父に欺かれた當時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を悪く取る丈あつて、自分はまだ確な氣がしてゐました。世間は何うあらうとも此己は立派な人間だといふ信念が何處かにあつたのです。それがKのために美事に破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は、急にふら／＼しました。(「先生と遺書」五十二)

叔父は悪人である。「私」の財産をかすめとつた。その叔父に比べて「己は立派な人間だ」。「私」はそう考へている。これが「自我」の姿である。善人であるはずの「私」が卑劣な手段を用いる。そのため親友のKは自殺する。「自分もあの叔父と同じ人間だ」と考えざるを得ない。

い。この時「自我」の真姿がわかる。絶対なるものに対したとき、「自我」は、まことに卑しむべき存在なのである。そういう「私」が人生をいかに生きていくか。これが「世界観・人生観の総決算」である。「総決算」は、しょせん実現しえざるものであらう。もちろん、「死」という方式はある。そして『こゝろ』の「私」はそれをした。しかし、その方式は放棄である。逃避である。「放棄」や「逃避」でなく、この世に生き続ける建設的総決算でなければ、「総決算」とはいえない。漱石は『こゝろ』において、「自我」のありのままの姿を描いた。人間ひとしく持つこころの実態を描いた。このこころをどうするか。『硝子戸の中』も、「自我」の苦悩を次のように描く。

「然し其藝者は貴方の爲に死んだのぢやありませんか」

「さあ……。一度に雙方の旦那に義理を立てる譯に行かなかつたからかもしれません。……。然し私等二人の間に、何處へも行かないといふ約束はあつたに違ひないのです」

「すると貴方が間接に其女を殺した事になるのかも知れませんね」

「或はさうかも知れません」

「貴方は寢覺が悪ありませんか」

「何うも好くないのです」

(二十四)

好男子の使用人が年賀に來た。漱石と話をかわす。その人は十九歳の芸者と二年ばかり会つてゐた。その女に旦那が二人あつて、身受の金をせり上げた。女は自殺した。実は、「二人の間に、何處へもいかないといふ約束」があつた。二人とは使用人と女である。この場合、使用人に責任がないか。「自我」は女を得ようとする。そこで「約束」を

かわす。それが女を束縛する。二人の旦那のどちらになびくべきかという問題もあろう。しかしそれよりも、「約束」こそ女にとって生きる方向であつたであらう。「約束」を守れない女は死ぬしかない。漱石も使用人もそう考える。男が女を束縛している。もちろん、女も男を束縛しているであらう。しかし、女は自由の身ではない。金で買われた身である。そういう立場にある女の「自我」と、そのような立場にならぬ男の「自我」とは、大きな隔たりがある。男が「間接に其女を殺した事になるかも知れ」ないと漱石は考える。この考えは、人間の心の悪の問題である。「自我」が悪を生みだす。これに気づいている漱石は、絶対なるものと比べて、人間の卑小さを自覚する。この卑小なる「自我」を、いかにしたら絶対に近づけることができるか。これができれば、「総決算」の一部は成り立つのである。

『道草』の「自我」

「総決算」について、『道草』には次のようにある。

人通りの少い町を歩いてゐる間、彼は自分の事ばかり考へた。
「御前は必竟何をしに世の中に生れて来たのだ」

彼の頭の何處かで斯ういふ質問を彼に掛けるものがあつた。彼はそれに答へたくなかつた。成るべく返事を避けやうとした。すると其聲が猶彼を追窮し始めた。何遍でも同じ事を繰返して已めなかつた。彼は最後に叫んだ。

「分らない」

其聲は忽ちせゝら笑つた。

「分らないのぢやあるまい。分つてゐても、其處へ行けないのだらう。途中で引懸つてゐるのだらう」

「己の所爲ぢやない。己の所爲ぢやない」
健三は逃るやうにずん／＼歩いた。

(九十七)

健三は、幼い時養子にいった。そこは島田といい、今落ちぶれている。作家として有名になつた健三のところへ金をせびりに来る。大枚百円を支払うことになる。健三は考える。こういうことをしなければならぬのが人生というものと。小さい時に養子に行かされて苦労し、一人前になつて、かつての養子先から金をせびられる。健三は「健康の次第に衰へつゝある不快な事實を認めながら——略——猛烈に働いた。——略——他を屠る事が出来ないで己むを得ず自分の血を啜つて満足した(百一)。健三は、自分の肉体を削つて百円を作つた。こういうことまでしなければならぬのが人生というものだろうか。「分らない」。ただ「己の所爲ぢやない」と考える。健三の「自我」は、そう答える。そうしか答えられないのである。養子に行ったのは、進んでいったわけではない。よぶんな子として行かされたのである。だから自分のせいであるはずはない。そう考えるのは当然であらう。しかし現実には、それですむわけではない。『己の所爲ぢやない』ことのために、大枚百円をかせがねばならぬ。身を削つて支払う。こんな不合理なことがあるのか。健三の人生は不合理に満ちている。「自我」は納得できない。しかし、不合理が、絶対なるものの姿であるようだ。健三は、そのことがわかりかけたようである。しかし、「分つてゐても、其處へ行けない」。総決算の答えはわかつてゐる。しかし、それを容認するわけにはいかない。その理由は何か。「自我」があるからである。もう一つ『道草』から引用しよう。

「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない。一遍起つた

事は何時迄も續くのさ。ただ色々な形に變るから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」
(百二)

これは、あと四行で『道草』が完結するところである。健三の「総決算」である。自分に責任がないと思われれることにも、身を削ってその任をはたさなければならぬと同じように、世の中のことは、何も「片付く」ことはない、と健三はいう。自然科学の理論では、原因があつて結果がある。そして、その法則は不変のものとなる。ところが、人間の世界では終わりが無い。不変のものはない。いつまでも変化し、變形して続いていく。健三は、そう考える。これが健三の「総決算」である。ただし、この決算は締めくくりではない。「何時迄も續くの」である。健三は悩み続け、血を流し、身を削らねばならない。健三の「自我」はこのことを知っており、人の世における非運の責任をはたしながらも「己の所爲ぢやない」と、心の中で叫び続けるのである。

『明暗』の「自我」

『明暗』に次のやりとりがある。

お延は猶黙つてゐる津田の顔を覗き込んだ。

「貴方何とか仰しやいよ」

「何て」

「何てつて、お禮をよ。秀子さんの親切に對してのお禮よ」

「高がこれしきの金を貰ふのに、そんなに恩に着せられちゃ厭だよ」

「恩に着せやしないつて今云つたぢやありませんか」とお秀が少し癩走つた聲で辯解した。お延は元通りの穏やかな調子を崩さな

かつた。

「だから強情を張らずに、お禮を仰しやいと云ふのに。もしお金を拜借するのがお厭なら、お金は頂かないで可いから、ただお禮を仰しやいよ」

お秀は變な顔をした。津田は、馬鹿を云ふなといふ態度を示した。

(百六)

三人の「自我」の葛藤が描かれている。津田は、入院のために金が必要である。妹のお秀がその費用を工面して持つて来る。しかし、津田はそう簡単に受け取らない。「恩に着せられ」るのがいやなのである。漱石は幼い時、里子にやられて苦勞をし、長じては、その養父から、昔の恩義をたてに金をせびられている（『道草』では、事実そのものが書いてあつた）。こういう體驗を持つ筆者が描く津田は、恩義を着せられるのを嫌う。津田は、京都に住む父に金を借りようとしたが、用立てはできないという返事が来る。お秀がなんとか工面して持つて来る。そこで妻のお延は津田に對して「秀子さんの親切に對してのお禮」を言いなさいと言う。お秀は工面して来てくれた。こちらとしては、お禮をいうべきである。お延にとって、当然の論理である。しかし、それが津田にとっては当然にならない。不安になる。「恩に着せられ」さうである。これが津田の「自我」である。いや漱石の「自我」といえる。津田はそういう幼い時の疑念がある人物としては描かれていない。漱石の死によって中絶したためか、そうは描かれなかった。ともあれ、津田は妹の好意を素直に受け取ることができない。ただ、「高がこれしきの金を貰ふのに、そんなに恩に着せられちゃ」ということは、お秀を傷つける。お秀は「癩走つた聲」を出す。当然であろう。苦勞して金を都合して来たのに、「高がこれしきの金」とは何事だ、と

言いたいであろう。しかし、お秀の「自我」は、それをことばにはしない。「恩に着せやしないつて今云つたぢやありませんか」という程度の弁解をする。この場合、お秀はいきりたつてもいい。好意を無にする暴言を、激しく非難してもよい。しかしお秀は、それを抑える自制心を持っている。これがお秀の「自我」である。一方、津田は血を分けた妹といえども、心の底からは信頼することができない。それは津田の心の奥底を流れる人間への不信である。これが津田の「自我」である。この「自我」がお秀の親切を受けつけない。

これに対してお延は、なんとかお札をいわせようとする。お延としては当然のことであろう。なんとか丸くおさめたい。夫の津田が「強情を張」っていると考える。お延の「自我」から見るとそうなる。津田の外側を見ているお延がそう思うのは、当然である。「強情」な夫である。だから、一歩進むと、金は借りないで、貸そうという好意に対してだけでもお札を言わさなければならぬのである。確かに、お秀は兄のためを思つてこうして金を持って来てくれている。津田の妻としては、お秀にお札を言つてもらわなくては、自分の立場がないのである。しかし、お秀としては変なものである。せっかく金を持って来ているのに、受け取らないでお札を言われるのだから。また津田としても、もつと変であろう。借りもしないでお札をいうなどという気にはなれない。だから「馬鹿を云ふなといふ態度」になる。

これら三人の、以上のやりとりは、それぞれの「自我」がからみあつたものである。そして、それぞれの「自我」は、それぞれの心の奥底から発しており、現実のこの場面での自分の立場において、「自我」の命ずるままに発言されているものである。

かくて、この『明暗』における「自我」も、『道草』の健三が述べた

「世の中に片付くなんてものは殆どありやしない」ということばに示されるような様相を呈している。津田の人生だけでも、どうなるかわからない。お秀の人生もそうであろう。お延も、片づかない人生を生きていくであろう。三人がからみ合つて、複雑な、片づかない人生を生き続ける。そしてその状態の根底には、それぞれわけのわからない、総決算の不可能な、「何時迄も續く」世の中、いつまでも悩み続ける人生がある。かくて「自我」は、「片付」かないまま、からみ合つて続いていく。

おわりに

「自己本位」が漱石を強くした。西洋に対する範囲において、「自己」は強くなった。英文学に対しては、独創的な日本文学で対すればよかった(漢文学なら、創出しなくてもそのまま英文学に対することができる)。しかし、相対でなく、ひとり存在する「自己」に対しては、また「自我」に対しては、無限の距離を、無限の時間歩み続けてみても、定まれるもの、安らかなるものに到達することはできない。「自我」の奥底は深くて暗い。大学を去つて漱石は、そのはてしない苦難の道を歩いた。そして半ばにして倒れた。

注

- (1) 全集(岩波書店新書版)第二十一卷「私の個人主義」一四一ぺ。
- (2) 全集第二十一卷「現代日本の開化」五一ぺ。一九一一年八月十五日、和歌山市での講演による。
- (3) 全集第十八卷『文學論』序八ぺ。
- (4) 同 右 十ぺ。
- (5) 全集第二十三卷『木屑録』二五ぺ。房総を旅した時の紀行文。明治

- 二十二年作。
- (6) 松岡譲『漱石・人とその文学』（潮文閣・昭和十七年刊）。引用文は、佐古純一郎「漱石の漢詩文」（有斐閣『講座夏目漱石』第二巻収載）による。
- (7) 『二松学舎大学九十年史』（昭和四十二年刊）による。この教科内容も、前掲「漱石の漢詩文」所引。
- (8) 『文学論ノート』は、村岡勇編『漱石資料—文学論ノート』（岩波書店昭和五十一年刊）による。
- (9) 前掲『文学論』序一一一ぺ。
- (10) 前掲「私の個人主義」一四一ぺ。
- (11) 『作家以前の漱石』（頸草書房）二二三ぺ。
- (12) 同 註4。
- (13) 全集第十二巻二二六ぺ。
- (14) 全集第十七巻一六八ぺ。
- (15) 全集第十三巻二一六ぺ。
- (16) 全集第十五巻六ぺ。